

平成30年度 大学院短期招聘研究員の研究活動報告

招 聘 者：文学研究科 教授 金子修一

招聘研究員：陝西師範大学文学院 副教授 郭雪妮

招 聘 期 間：平成30年10月1日（月）～平成30年10月31日（水）

学術交流報告（講演会等）①

実施日時：平成30年10月7日

実施場所：國學院大學渋谷キャンパス3401教室

タイトル：《典論》論文と「国風暗黒」時代の文学

参加対象：国書研究会メンバー及び外部の研究者

概 要：古代の日本人は『李善注文選』を通して《典論・論文》に接した。このことは、日本における《典論・論文》の影響を考察する上で、第一に唐代の「文選学」の媒介した役割が忽せにできないことを意味している。『文選』が「文（文章）の大義」を尊重していることと曹丕の《典論・論文》に対する意識とは表裏をなしており、併せて9世紀初頭に日本が《典論・論文》を受容した際の方角——「文章経国」を主要な位置におく——に影響を与えている。日本の学界では、平安初期の「文章経国」思想について肌理細かに考察されているが、それらは「内部」的な研究に集中し、本文の展開するような「外部的」な研究の可能性を遮断する傾向にある。《典論・論文》は即ち「文章経国」思想の本源であり、また中国の文学批評史上の最初の専論である。その「文」に対する自覚及び「文」を論ずる行文の形式は、暗々裏のうちに日本人の文学の起源、発展及びその本質や役割等の問題の思考方法に影響を与えた。「経国集」の序の中国文学の役割に対する判断は、こうした思考に対する最初の成果であると言える。こうした意味から、《典論・論文》は中国の文章論の最初の成果であるのみならず、日本の文章論の淵叢であると称するに堪えるものである。

学術交流報告（講演会等）②

実施日時：平成30年10月20日

実施場所：若木タワー0504教室

タイトル：長安都市景観与文化空間的東移——以平安朝的慈恩寺詩為中心」

参加対象：東アジア儀礼文化研究会のメンバー

概 要：平安朝の貴族の詩歌では長安がしばしば詠われたが、当然のことながら長安を

実見しない貴族が多い。彼等の中における長安のイメージと現実の長安とのずれを、特に慈恩寺に関する詩を中心として論じた。日本の文人は、慈恩寺に関する複雑な文化的イメージの中から、特に白居易の“三月盡”“紫藤”“惆悵”の語を、慈恩寺に関わる独特の符牒として文学的な語彙の中に置き、日本の時間的流転の中で、中国とは異なる文化的な解釈と意義とを再創造した。すなわち、“慈恩寺”という中国と日本とで共鳴し合う地理空間を通して、日本の詩人と白居易とが詩学上の共鳴を実現した、ということができよう。

学術交流報告（講演会等）③

実施日時：平成30年10月24日

実施場所：若木タワー0507教室

タイトル：東寺本《弘法大師行状絵》所見長安青龍寺

参加対象：金子修一 東洋史特殊研究Ⅰ・東洋史研究Ⅰ参加者及び学外等参加者

概要：日本では鎌倉新仏教興隆の中で、弘法大師についても多数の絵巻が作られたが、最も内容の完備しているのが重要文化財の東寺本《弘法大師行状絵》である。この《行状絵》の絵画と詞書の比率で見ると最も長大なのが、長安の青龍寺で弘法大師が恵果阿闍梨から胎藏界と金剛界との密教両部を伝授された部分である。《行状絵》における青龍寺は深山幽谷の中にあり、かつ恵果の居た東塔院が主要な建築群として反復して描かれている。実際の青龍寺は長安城の南の平地にあって、唐の会昌5年（845）に武宗の廃仏によって廃寺となり、長安の寺院の中では地位の高い寺院ではなかった。しかし、平安時代に入唐した日本の高僧の大半は青龍寺で修行しており、空海の真言宗の巨大な影響もあって神秘化、神聖化され、青龍寺は古代日本人の想像上の長安における景観の重要な要素となったのである。